The Japanese School of Johannesburg NEWS Letter
めざせ！南十字星
9
２０２６(令和８)年
月３０日発行
ヨハネスブルグ日本人学校 学校だより

学校教育目標
国際感覚を身につけ、確かな学力と
豊かな人間性を備えた児童生徒の育成
合い言葉：自立・貢献

AI 時代を生きる「学力」 前編

校長 石山 秀樹

この９月、相次いで２つの学力調査の結果が発表されました。一つは、左図に公開されている問題例を示した、日本の文部科学省によって今年度当初に実施された「全国学力・学習状況調査」（以下、「全学調」）です。もう一つは、下図で問題例を示した、昨年実施された OECD が進める国際的な学習到達度調査である、PISA2025（Programme for International Student Assessment）です。

この二つの調査は全く性格が異なります。文部科学省の全学調は、義務教育の機会均等と教育水準の維持向上の観点から、国の教育施策の検証と学校における教育指導の充実を目標とし、小学６学年児童と中学３学年生徒を対象に毎年実施されています。今回の調査は、国語・算数/数学・英語の３教科で実施されました。一方の PISA は、世界の 91 の国と地域が参加している調査であり、規定に基づき抽出された 15 歳生徒（日本からは 183 校、約 6500 名の高校１年

四 林さんは、本文を読んで理解したことをより深めるために、〈具体的な場面〉を思い浮かべながら、二種類の例文を書いてみました。あなたは、〈例文1〉と〈例文2〉を比べて、擬態語にはどのような効果があると考えますか。あとの条件1と条件2にしたがって書きなさい。
なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

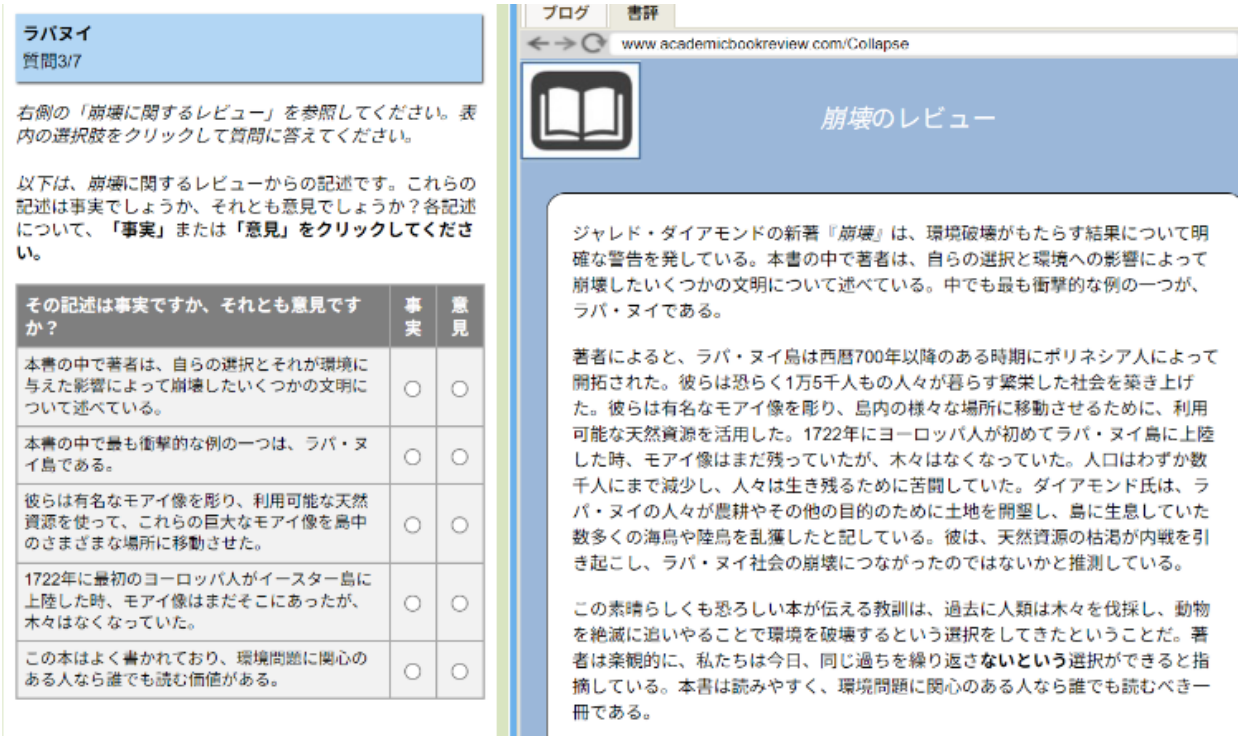
〈具体的な場面〉

〈例文1〉〈擬態語を使っていない例文〉
「いいえ。たくさん練習してきたから大丈夫です。」
生徒は言った。

〈例文2〉〈擬態語を使った例文〉
「いいえ。たくさん練習してきたから大丈夫です。」
生徒はきっぱりと言った。

条件1 〈例文2〉の擬態語「きっぱり」がどのような様子を表しているかを具体的に書くこと。
条件2 条件1で書いたことを踏まえて、擬態語の効果について、本文中の言葉を使って書くこと。

令和８年度全国学力・学習状況調査 中学校 国語 より抜粋



OECD PISA2025 読解力調査 より抜粋（文章は自動翻訳，問題例は公開されている PISA2019 のもの）

生）を対象としています。調査の目的は、読解力、数学力、科学力といった知識や技能を活用して現実社会の課題に取り組む能力の測定することであり、結果を各国･地域の教育施策に生かしていくこと等が期待されています。今回のPISA2025 では科学力、次回の PISA2029 では読解力に重点が置かれるといったように、毎回重点とされる項目が異なりますが、測定された各学力で、これまでの結果を基に経年の成果や課題を見出すことも可能です。

本校は残念ながら参加できているわけではありませんが、私はこれらの調査で問われている内容が、「これからの時代」を生きていく子ども達がつけるべき学力の方向性を示すものだと捉えています。

調査の成果や課題について詳しくは、公表されているそれぞれのウェブサイト等で御覧いただきたいと思いますが、特に日本の小･中学校教育に携わる立場として気になるところを掻い摘んで採り上げると、以下のようになります。

まず全学調では、学年や教科を問わず、「深めた理解や考えを、伝わるように工夫し表現する」ことに引き続き課題がある、とされています。このことは、文部科学省の現行の学習指導要領が「知識及び技能」を土台として、「思考力･判断力･表現力等」並びに「学びに向かう力･人間性等」の育成を目指していることからも当然に検証され、未だ到達度としても不十分であるということでしょう。

小･中学校の授業で必須の、例えば四字熟語、四則演算、地名や歴史上の出来事、化学式や英単語等々を知識として蓄えることはもちろん必要です。しかし、ここで問われているのはそれらを踏まえた考える力、さらに自分の意見や思考を他に向けて伝わるように表現する力だということです。例題の「きっぱり」であれば、求められるのは問題や条件の正確な読み取りをし、それらに合致するように日常生活でも使われる「きっぱり」について伝わるよう文章表現することです。教育現場の対応としては、例えば普段からある事柄について自分の考えをまとめたり、字数や時間制限をつけてそれらを表現したりすることを繰り返し、考えることを面倒臭がらない、思考の基礎体力をつける取組などが挙げられるでしょう。

次に、PISA2025 の結果では、一言でいえば「とてもよくできた」ということになります。科学力・読解力・数学力のそれぞれにおいて、日本は調査に参加した OECD 各国の中でトップレベルの結果を示しました。ただしこの結果は、日本が成績を向上させたということではなく、参加各国の成績が 2015 年から 2025 年にかけて顕著に低下した中、日本が 3 つの分野それぞれにおいて成績を維持できたことによるものです。同期間に参加国の平均で PISA が最も重視する科学力の成績は-11 ポイントの比較的軽微な低下でしたが、読解力の成績は-28 ポイントと大きな低下を示しました。

PISA に限らず、読解力は科学や数学を含む様々な課題の理解やその解決のための基礎となる役割があります。日本が他国に比較して読解力を維持した原因は何か、気になるところです。この PISA 調査結果では、日本の特徴の一つとして学校や授業における ICT の活用度合が他国に比べて低く、特に課題等について生徒が AI チャットボットを利用する割合が顕著に低いことが取り上げられています。ということは、「デジタルや AI で後れを取っているから読解力が維持されている」と、単純な結論を出したくなりますが、調査結果では次のように提示されています。

一つには、学校の教育環境の悪化…学習から逃避する生徒の増加、授業規律維持の困難、これらに対する学校や管理者の対応です。二つ目には、社会の動向として、読書習慣の変化、デジタル化の進展、そしてパンデミックが取り上げられています。およそ想像のつくところですが、PISA2025 の読解力調査で最も落ち込みの激しかったのは、いわゆる「長文読解」…例示した「ラパヌイ島」の問題も、レビューやレポートを読み込んだ上での自分なりの思考と選択を迫られるものでした。

…紙数が尽きましたので、次号に続きます。

全国学力学習状況調査
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/1419141_00008.htm
PISA2025
https://www.oecd.org/en/about/programmes/pisa.html#initiatives
国立教育施策研究所 PISA
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pisa/index.html